

Title	田中生夫著 イギリス初期銀行史研究
Sub Title	I. Tanaka: Studies in the early history of banking in England
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.6 (1966. 6) ,p.658(114)- 661(117)
JaLC DOI	10.14991/001.19660601-0114
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660601-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田中生夫著

『イギリス初期銀行史研究』

飯田裕康

銀行史研究』であろう。むしろ、これらの労作は、すでにわが国で歴史の古いこの分野の幾多の業績に立脚するものであることは否定しえないが、その視野と、分析視角の総合性において、この時期の研究にひとつの方向、水準を提示したものと考えることができるであろう。

イギリス初期銀行史という場合、おおかたは、一六九四年のイングランド銀行 (The Bank of England) の設立前後の時期を意味している。イギリス金融史において、この時期、とりわけイングランド銀行設立は、一つの劃期とされ、先行した市民革命とともに、従来多くの研究者がとりあげてきたし、今後もとよりあげられてゆくであろう。しかもこの時期は、たんに、金融史という側面のみでは把握しきれない、多くの問題点を含むことは、言うまでもない。経済史上、原始蓄積期として、また、経済学史上の重商主義期として、多方向からのアプローチを可能としている。言いかえるなら、この時代の、とくに、金融問題をとりあげるとい場合でさえ、このようにいくつかの基礎的側面との総合的分析が要求されるということである。

最近われわれは、こうした問題自体のはらむ複雑性への十分の考慮のもとになされた貴重な労作を手にしうるようになった。一つは、杉山忠平氏の『イギリス信用思想史研究』(未来社、一九六四年)であり、もうひとつが、ここに紹介する田中生夫氏の『イギリス初期

わが国においては、この時期を原始蓄積期、あるいは初期資本主義期と呼んで、従来、きわめて精緻な研究がおこなわれてきた。その中心にあつてつねに水準を高めてきたものとして、大塚久雄教授の『近代欧州経済史序説』以来の研究業績を看過することはできない。このことは、比較的歴史の浅い金融史の分野に、基本的な方向を与えることにもなり、とりわけ、イングランド銀行史の、従来国外でおこなわれてきた制度史的研究の動向を、社会経済史的な側面から補強し、独自の歴史解釈を示したものとして注目しなければならぬ。さきあげた二つの労作が、いずれも、この大塚教授の所説、あるいは、その考え方に立脚する人々への評価と批判によつて特徴づけられるとすれば、われわれは、ここで、大塚教授に代表される人々の、この時期、とりわけ金融史へのアプローチの視角を明らかにしておかなければならない。(この点については、本書第二章が史実に即して、批判を展開している。)

第一に、資本主義の成立にみられる近代化の過程は、金融関係の分野においては、いかに遂行されるのか、という点をあげなければならぬ。

いわゆる初期資本主義を、農村工業(毛織物工業)を中心として展

開される中産的生産者の産業資本家への推転として把握するこの見解にあつては、一方で農民層の分解による資本Ⅱ賃労働関係の形成、地方での前期的諸資本への反抗・闘争が基本的なモメントとしてあげられるであろう。大塚教授は、マルクスに依拠しつつ、信用関係

判的に関説している点に十分注意を払う必要がある。例えば、第二章や第五章、第七章など。

の側面については、近代的商業信用(生産者→生産者、生産者→商人)を金融関係近代化のメルクマールとして提起され、それを、前期的商業資本による問屋制の前貸に對抗するものとして把握される。したがって、近代的信用関係は、ロンドンに中心を置く、巨大冒險商(エンタープライズ)・貿易商人においてではなく、むしろ農村工業内部に中心をもつものと考えられている。このような理解にたつことで、イングランド銀行の成立を、産業資本へ推転する初期資本家の利害から、いわば信用諸関係の国民経済的統合者として、把握しようとするのである。また、この過程を原始蓄積期として捉え、重商主義をその政策体系とすることで、十七世紀中葉以降に活発化する利子・為替をめぐる論争、信用制度(銀行業設立計画)をめぐる論争が、イングランド銀行の設立に帰一するものとされる。

このような見解は、この時期の全体像をきわめて典型的に示しうるものとして今日まで強力な支持者を得ているのであるが、それに対して、きわめて基本的な歴史理解において批判が寄せられていることを看過してはならない。田中生夫氏の本書を一貫して流れる主張は、こうしたシェーマへの疑問を、従来の研究を厳密に検討・理解することで提起するということであろう。そういう点からすると、ここに収められた八つの論文が、それぞれ大塚氏等の見解へ批

本書は、つぎの八章からなっている。第一章、イギリス初期銀行史序説。第二章、いわゆる「近代的商業信用」の特質。第三章、十六世紀イギリスの銀行計画。第四章、金匠銀行以前の金匠。第五章、イングランド銀行の設立。第六章、イングランド銀行の初期割引業務。第七章、第十八世紀末―十九世紀初期のイギリス信用制度。第八章、一七六二年および七二年のスコットランド銀行恐慌。以上の各章は、著者が多年にわたつて発表された個別論文に、新たに手を加えられて、まとめられたものである。しかし、さきにふれたとおり、本書には、あきらかに一貫した意図と視角とが存するのであつて、ほぼ二〇〇年余にわたるイギリス金融史の重要問題が扱われているといつてよいであろう。その意図の第一にあげなければならないのは、銀行業という業態の複雑な社会機構に、明白な理論的基準をもつて、アプローチされている点である。それは、いささか抽象的で単純化されすぎるきらいのなほないが、金融史という特殊な領域への接近としては許されるであろう。というのは、「近代的」銀行、あるいは近代的信用関係の基軸としての銀行信用を、信用貨幣の発行による貸付けという点に求めることである。この点は、たんに、掛売買による信用から一歩前進した形態として、いわば広義の信用創造が中心になるということであり、預託が業態の中心をなして、

「バンク」と呼ばれているような信用機関も、厳密に、近代的銀行から区別されている。このような規定は、十八—十九世紀の金融史の理解にきわめて有益であるという点を、著者は示されている。

マルクスによれば、資本主義の基本的信用形態は、商業信用と銀行信用とであり、それらは、歴史的範疇としては、一方は単純商品流通に基づく掛売買、他方は、貨幣取扱業に、それぞれ先行的形態を見いだすものであった。資本制生産にあつては、これら二形態はお互いに絡み合いつつ信用制度を形成している。また、商業信用、銀行信用そのいずれがより基本的な範疇であるかは、一つの課題をなすであろうが、信用制度が、産業資本の論理(ロゴス)のなかに組みこまれることによる「従属」が、擬制的な関係(「物神的関係」)を進展せしめる以上、信用創造といわれる事態が、その完成形態として把握されることは当然であろう。初期資本主義における「貨幣不足」が、たんに商業信用系列の近代化によって打開されるのではなく、信用諸手段、とりわけ、紙券信用の擬制性を通して解決の方向が見出されてゆくことをあきらかにした点で、本書は従来の諸見解を一步前進せしめることになつてゐる。すなわち、十七—十八世紀の諸銀行設立計画(Banking scheme)を、イングランド銀行に対抗する勢力として、いわば近代化への抵抗とみることから、いずれも、産業交易(Trade)をさかんにして貨幣不足を解消し、利子率をひきさげると同一方向への対応の仕方の差異としてあきらかにし、イングランド銀行の設立後も、いくつかの銀行計画が登場する意義を、近代的銀行への志向という前向きな姿で評価するのである。本書の

銀行計画史論は、かくて、杉山氏のそれとともに、従来の支配的見解への有力な批判となりえてゐるのである。

第二に、従来、都市の巨大商人(外国貿易に従事するような商人)の金融関係近代化の役割には、消極的評価がなされてきた。とりわけ、為替論争という重商主義の初期から後期にわたる一大論争問題の解明とともに、その前向き性、独占性が強調されてきた。しかし、田中氏は、商人層の見解の差異を克明に描き出し(第三章)、そのなから、近代的対応を析出することで、さきの産業交易の発展のための信用制度という基本線に結びつけられている。この点が、金匠を単純に近代的銀行業の先駆者とするのでなく、ロンドン・シティの商人の金融上の操作に、むしろイングランド銀行の設立に導くような経済的実力をみるという点に帰着せしめてゐる。

第三の点としてあげられるのは、十八世紀から十九世紀にかけて、イングランド銀行が「近代的銀行」として「確立」するといわれる過程が、従来言われているときイングランド銀行中心の金融体制の完成ではないということである。これを、高利禁止法と、イングランド銀行の手形割引業務(対民間業務)の推移のうちにもよるとされる点である。ここには、いわゆる産業革命期にイギリスの金融組織がいかなる役割をはたしたか、という重要な課題に関連する貴重な示唆があると考えられる。

イングランド銀行は元来、その法制的根拠からすれば、財政上の必要から生れたものである。しかも、ロンドン・シティという狭い取引範囲を前提にしたうえで、の業務であつて、対民間取引は、いま土地所有者が産業資本の論理に組みこまれる過程と、そうした動向にたいする土地所有者の抵抗ということを意味しているのではなからうか。

いまひとつの点は、イングランド銀行の銀行紙券の流通範囲と、地方銀行の紙券発行・流通という問題があるであろう。ロンドンの銀行としてのイングランド銀行と地方銀行との対抗は、十九世紀の初頭までつづくが、それを支えたものは、地方個人銀行、銀行業者の割引業務と、ロンドンの市場利子率との差異という点に注目しなくてはならないであろう。すなわち、この時期において、イギリスの金融市場の構造を、貨幣資本の供給側はもとより、需要側(産業資本)の分析を加えて、明らかにしなければならぬ。その点で、関口尚志氏等の提起される織元銀行業者という範疇がここに注目したものであるとすれば、十分注意を払うに値いするのではなからうか。(日本評論社・一九六六年三月刊・A5・二二六頁・七六〇円)

だ重商主義的色彩の濃い商人資本を対象としたものであった。イングランド銀行が真に国民経済的金融の中心となるのは漸く十九世紀を迎えてからのことである。こうした点に注目されて、イングランド銀行の割引対象である紙券が同時に擬制資本であるという二重性を軸に、割引業務の停滞理由を説明されている。

重商主義的金融体制の残存の下で、いかにして近代的銀行制度の確立が進められたか(一六三頁)という著者の問題提起に示されているごとく、本書は、イングランド銀行の設立を軸とした金融体制を、一方で近代化の推進主体として、また、他方で市場利子率の引下げを実現する機関としての未完成、近代的な個人銀行業(農業地方の地方銀行)との対立という複雑構造として提示し、産業革命を経て十九世紀にいたる繁栄への曲折の一面をみごとに描きだしたということができようであろう。しかし、銀行史研究としては、なお残された問題もあるであろう。杉山氏においてもそうであつたが、田中氏においても、銀行計画、とりわけ土地銀行計画が、近代的銀行業への第一という面でもとらえられ、土地所有者階級が、なしくずし的に信用関係にまきこまれ、事実上の土地の商品化の進展から、利子率への配慮を必然化されるという点について消極的に関説されるにすぎないという点である。土地の価格の成立による資本還元率の事実上の措置こそ、国債の発行、流通(取引)と同一基盤にあつて、たんなる貨幣利害から利益(利潤)への利害対応への推移とともに、